Osaka University Knowledge Archive

Title	<書評>川添登著　「デザイン論」　東海大学出版会刊、1979年（初版）
Author(s)	向井, 正也
Citation	デザイン理論. 1979, 18, p. 113-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53650
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

川添　登著
「デザイン論」

東海大学出版会刊，1979年(初版)

1979年の暑かった夏の一ヶ月あまり，私は冷房のない河内の陋屋の一室にあって，たえず本書を座右に置き，ひまを見て読みかえしつつ，いくたびかその書評を試みようとしては，そのたびごとにはねかえされ，挫折をくりかえして来た。単に暑さのせいばかりでなく，何とも不愉快な，いらだたしく，うっとうしい日々であった。

たまたま書店で見つけ，同じ年の4月に初版が出たばかりのタイトルは単刀直入に「デザイン論」と，その思い切ったネーミングに惹かれ，川添登という人物の〈論〉の性質を知りつくしていながら，でも今度はと，ついうかつにもひっかかったのが私の不明だった。本書もまた例によって例の如く，そうやすやすと批評のペースに乗ってくれるようなすなおなものではなかったのである。

同じ版元から一年前に出た，私の京都大学時代の恩師森田慶一博士の著書に，本書と同様単刀直入のタイトルの「建築論」というのがある。建築芸術の意味を概念的に考えようとする建築家や愛用者の知的欲求に出来る限り組織的，斉合的に応じようという，この首尾一貫した論旨の渾然とした「建築論」に接していた私は，同じタイプのタイトルをもつこの「デザイン論」もまた同様の線で，デザインを全体的な視野から組織的に把もうとしたものだろうと考え，これまでのところ，そうした体系だったデザイン論は欧米にも類書は見当らぬところから，川添もとうとうやったが，という先を越された感概と，彼ならばやりなおせるだろうとの期待で，休暇に入ってよむのを心まちしていたのだった。

ここで結論的に，全体としての評価を先に与えるならば，本書は森田博士の「建築論」などとはむしろウラハラに，まとまりを欠いた，初学者などにはあまり読ませたくない性質のものだといってよかろう。

ゆたかな教養と確乎とした見識を備え，デザインについての一家言をもつほどの人ならばともかく，未熟で不安定な精神で本書に接するならば，川添独特の牽強付会(こじつけ)の論理操作の迷路を前後不覚にひきまわされ，デザインについての解明はおろか，ヤワタノヤブシラズに，かえって混迷の度を深める結果になるおそれがある。

本書が,そのタイトルから,だれもが想像するような，ある体系をもった斉合的な論理によって組織づけられたものではないことは，巻末に示された，内容の論文の「初出誌一覧」に示された年代を見てもある程度は推察されよう。すなわち，第1章デザイン原理は1969年，第2章モダンデザインは，第1節'74年，第2節'71年，第3節'68年，第4節'72年，そして第3章くらしとデザインが'72年となっている。

こうした全体としての一貫性を重視する論考は，理想的には明確な全体の論理構成の骨組に支えられた書き下しが望ましいのはもとよりだが，たとえこのように発表年次がバラバラでかつ章節の組立順序に乱れがあっても，全体をとおして作者の思考に乱れがなく，当初から各論考が，綜合としてのデザイン論の一環として意識されたものならば，後につなぎ合せて渾然とした一体にまとめることも可能だとは思うが，この書はどうもそうした性質のものではないようで，それぞれ別の時期に，その時々の思考のおもむくままに書かれたバラバラの論考のよせ集めとして，内容的に一貫性を欠くだけでなく，到るところで混乱が渦をまいており，その全体としての読後感はきわめて散漫である。私が最初にいらだたしいといったのはこの辺のところで，再三よみかえしてみても，読んだものが論理的に思想の構築物をつみあげて行くのではなく，読んだしりから次々と崩れ去ってしまうもどかしいものなのである。

私は以前本欄で栄久庵憲司の書評を行った〔デザイン理論15(1976)〕が，そこで鶴見俊輔の説を援用して，オイルショックの'73年以前の高度成長期の価値感にもとづく論考は，その後の現実には役に立たない場合も，人によってはおこりうる点に注目しょうとしたが，ちょうどその場合の栄久庵と同じく，今回の川添もまたその意味で，内容的にかなり疑問と思われる考え方が,そのままリプリントされている。事実この「デザイン論」を構成する論考で'73年以降に書かれたのは，第2章第一節モダン・デザインの成立ただ一つだけという事実も，特に彼の場合には問題があると思われる。

もとより人によっては，論文の価値はそうたやすく時代によって左右されたりはしないだろう。だが川添の論については事情はおのずから異るのである。彼はいうなれば60年代の建築・デザインのスポークスマンをもって任じた人である。

彼が黒川紀章や菊竹清訓らとはかつて，60年代の初頭，あの世界デザイン会議(Wo De Co)を，その運動の出発点とした，今では世界のデザイン史上有名なメタボリズムとは,.当時いわゆる「黄金の60年代」(The Golden Sixties)とうたわれた高度成長期の指導的なデザイン理論だったことはいまさらいうまでもない。

栄久庵もまたこのメタボリズムの同人だったわけだが，川添は本書にも熱を入れて展開している「道具論」を介して，メタボリスト達の中では，最も栄久庵の思想に近い線を歩

むものといえる。上記栄久庵の書評の中で，私は彼の道具論は，高遇な世なおし論の観念の衣(ころも)の下から，「高度成長」のアニマルの鎧の端がチラチラすると述べたが，このことは川添の場合とても全く同様である。否彼の場合は，栄久庵のような粗朴さがなく，牽強付会の度合が―そう強いだけに，全く仕末に悪いものだと考えられる。

ここまで書いて来たら，筆が渋滞して動かなくなり，先をつづけるのが何とも無意味に思思われて来た。はじめにも書いたように，本書をとおして一番問題とすべきものは，その牽強付会のゴジツケ論法の虚妄さにある。いくら真険にぶつかってもホコ先をかわされたり，はぐらかされたりで，結局何もつかめないのである。

その好例の一つは，彼と栄久庵をむすぶ共通の思考としての「道具学」なる理論であろう。これは先に本誌での栄久庵の書評でも少しのべたが，ここでもう一度くりかえしておく必要があると思う。

そもそも「道具」の本来の意味は，彼らのいうような，歴史的，現実的な裏ずけから切りはなされた形式的な抽象論で解明出来るものとは思われない。コトバの上っらをひねって，その場の思いつきで意味をこじつける，落語によくある陰居(いんきょ)の説法のようなものからは何ほども出ていないのではないか。

後述のように川添も栄久庵も，「道具」とは「道の具(そな)えなどと，抹香息い辻説法をきめこんでいるが，それはもとよりデッチあげの彼らの勝手な解釈であって，わが国はもとより，世界のどこにも通用しそうもないものだ。

何より問題と思われるのは，それがコトバの上つらだけのことで，現実的な連関から全く切り離されたところにある。コトバにふくまれる概念内容を発生的，歴史的に意味をさぐり出すことをしないで，いたづらに，こじつけるために，こじつけがこじつけを生み，それが次から次への連鎖反応をおこして，とめどもなく，結果としては思いもかけぬ展開を示すことになる。つまりあの「風が吹けば桶屋がもうかる」式の論法である。

川添はこうして，「道の具(そな)え」或は「道の具現したもの」としての道具の意味のこじつけで，中国と西洋を思想的に連結するというハナレワザをやってのける。すなわち道具の「道」とは道徳であり，道徳には二つの道がある。一つは「人の道即ち「道徳」で，他は「天の道」即ち「自然の理」であるが，「自然の理」とは「自然的必然」＝「流れ」のことであり，「流れ」は，自然的であれ，人工的であれ，「水路」をつくりそこを流れるといい，その一方で，この「水路」づくりを，彼がクラックホーンの「文化とは歴史的に形成された外面的内面的な刺戟に対する反応に水路づけ（Canalisation）するところの撰択過程である」における「水路づけ」（このコトバ自体意味があいまいである）にこじつけて考えようとするが，更に加えて，この「水路づけ」こそはクラックホーンがデザインという

語に意味させようとしたものだといい，外面的内面的刺戟に対する反応が本能によって決定づけられる動物には水路づけの必要はなく，人間だけが水路づけ即ちデザインをすることから，要するに道はデザインであり，道具はデザインされたものだと結論するのである。一事が万事このような調子である。

くりかえしていうが，私はこうした論法は上述の「言葉ころがし」ともいうべき不毛な遊戯にすぎないもので，そこからは現実のデザインの問題の解明に役立つ何ものも生れないだろうと思う。

そこで何より問題だと思われるのは，このような事物についての観念的，形式的なものの考え方は，デザイン論の一面で是非ともとりあげられねばならない。生きた歴史的事実としてのデザインの把握にどうむすびつくかということである。そしてこのことがまた川添の本書におけるもう一つの大きな問題点だと私は思う。

第1章「デザイン原理」において彼は終始このような形式的な論を展開しつつ，デザインの領域を，①プロダクト・デザイン（道具的整備に関するもの）②コミュニケーション・デザイン（精神的整備に関するもの），③エンバイロメント・デザイン（環境的整備に関するもの）に三大別し，これを自然，人間，社会の三つの頂点をもつ，彼のいわゆる「デザイン三角構造」の各辺として，同じやり方図式化される「人間の三角構造」及び「文明の三角構造」に先に関連させつつ，これをさらにマルクスの「三位一体式」の概念とむすびつけるなどという彼独得のこじつけの論理操作により，ともかくも一応それなりのまとまりを見せてはいるものの，このようにして求められたデザインの本質が，次の第2章「モダン・デザイン」とは何らの関連をももつことなく，双方が別々のものとして，一本に体系づけられないままになっていることは，書名の「デザイン論」には全くふさわしからぬ，羊頭狗肉であることはさきにのべたとおりである。これはもとより，この川添特有の論理操作が，何より歴史的な現実の裏ずけをもって展開されるべきモダン・デザイン論を全くこなし得ていないことを意味するもので，量的にも本書の過半数のページ数を占める第2章が，川添のこうした論法には不向きな歴史的なコンテクストをもつべき性質のものであったことは，本書の全体の評価からして致命的だったとも考えられる。

内容的に見ても，第2章に関しては，単なる論理操作の問題だけに止らず，モダン・デザインそのものについて，かなり多くの基本的な面で，事実誤認やら無知が散見されることは見のがし得ない。ここで一々とりあげる余地はないが，まず全般的に見て，川添はモダン・デザインを歴史的にきびしく且正しく把握していないと思われるフシが多い。

例えばこれを「20世紀の産業社会が生んだ美の領域」（62）（カッコ内はページ数，以下同じ）と考えたり，その目的としての「普遍的な美の追求」（118）などといったコトバ

のはしばしに，この運動の基本的な契機としての社会関係や倫理性（モラリティ）には思いいたらず，たとえその「思想」について論ずるにしても，その理解の程度は，彼が「近代建築家のテーゼ」だとするものも，「機能的なものは美しい」といった安直でかつ，誤謬をふくんだものだったり（138），或はモダン・デザイン運動を単なるインダストリアル・デザインの運動の線だけで考えたり，又この運動をあくまでも20世紀の初頭に形成されたものとして，その「開始の時期」などという非歴史的なものを求めようとしたりなどなど，今日の近代建築史の常識の水準から考えてもかなり低いものでしかいようだ。

なお第3章「くらしとデザイン」は，以上の2章とはまたガラリと趣を異にする。くだけた口調の講演速記であり，内容からしても「デザイン論」のタイトルの下に一括するにはむしろ場ちがいなものだと思われる。

以上もっと早くおわるべきこの書評を，ここまで引きのばして来たが，もうどうにもガマンならないので，この辺で終ることにする。はじめにものべたように，いかにモダン・デザインについての体系的な理論に乏しい今日とはいえ，かくもバラバラな古い論考のよせあつめを，おくめんもなく堂々たるタイトルの下に一書としてあえて世に問う著者の態度は不可解というほかはない。

実にうっとうしくも，いやーな，本書とのつきあいの長い日々であった。いま私は本書からやっと解放されることに何よりもよろこびを禁じ得ない。おそらく私は今後二度と本書のページを開くことはないであろう。

（向　井　正　也）